

令和5年度 岡山県立津山中学校 学校評価書

校長 滝澤 浩三 印

1 自己評価

I 評価結果（別紙）

II 分析・改善方策

1 「豊かな人間性を育むために」

（1）確かな基盤としての人間力の育成

30校を越える小学校から新入生が入学してくることから、4月当初の集団づくりは特に重要な教育活動として位置付けている。新入生研修として、4月当初に校内外での集団活動を行うことで、早期に好ましい人間関係づくりを図った。年度当初の集団活動は、生徒間の好ましい人間関係づくりに寄与し、円滑な中学校生活のスタートに向けて大きな意義をもつことから、2・3年生もそれぞれの学年目標の中に組み入れて継続して指導した。

（2）失敗を恐れず積極的にチャレンジする機会の設定

今年度も各種コンテストやコンクールに積極的に参加を呼びかけ、応募数や受賞者数も昨年度並であった。特に3年生は、英検、漢検、スピーチコンテスト、物理コンテストなど積極的に挑戦し、個人やグループで頑張りながら成果を残した。引き続き生徒に参加の呼びかけを行い、積極的な挑戦を促していくとともに、新たな分野の開拓も継続して行う。

（3）1ヶ月に2冊以上の読書量の確保

個々に読書量の多寡はあるが、朝読書の指導、学級文庫の充実、生徒会文化委員会の取組等により、多くの生徒が達成することができている。Webを活用した本校図書室の蔵書検索も授業や家庭で生徒や教員が効果的に活用し、課題研究などの資料収集に役立っている。課題探究活動の場面でも図書の活用の充実を図りたい。

（4）学校外での体験活動の充実

第1学年は「地域を知る」というテーマのもと、地域の方に取材して地域の魅力を再発見するとともに、10月に外部講師の講演会で地域の現状やフィールドワークへの心構えを学んだ後、11月に地域の課題を発見するために美作地域の事業所でフィールドワークを行った。第2学年は「働く」を考えるとというテーマのもと、9月に外部講師の講演会で地域の現状、働く意義、仕事の魅力などを学んだ後、10月に4日間を通して、官公庁、接客業、製造業、販売業など38の事業所で職場体験を行った。第3学年は政治・経済の中枢を担う機関や最先端の研究に触れることを通して、自らの将来を展望し進路選択について考えを深めたり、多様な視点から我が国について理解を深めるとともに、国際社会に生きる日本人としての見識を深めることなどを目的として、東京方面へ4日間の修学旅行を行った。全学年での登山や中高合同でのウォーキング大会を行い、心身を鍛え達成感や充実感を味わわせるとともに、生徒相互の親睦を深め、自己の体力を知る機会となった。引き続き、生徒の安全を最優先としながら中高の交流も踏まえた体験活動の充実に努めたい。

2 「確かな学力を育むために」

(1) 基本的学習習慣の確立

毎日の生活ノートの活用や学期ごとの「生活の記録」調査結果などを活用し、個々の課題を把握し生徒への個人面談や保護者面談を通して、個別にきめ細やかな指導や支援を行った。また、「予習・復習2時間＋自主学习・読書1時間」計3時間の家庭学習時間の確保については、達成が十分でない学年や回があり、今後も生徒の実態を把握するとともに、継続して必要な指導や支援を行う。

(2) 生徒の自主性・主体性を育成し伸ばす指導の研究と実践

異年齢交流の重要な機会として位置付けている学校祭は、今年度は中高合同で開催することができた。体育の部においては、中学校全体の演技で3年生がリーダーシップを発揮し、1・2年生をリードし、集団をまとめ、生徒が中心となって創意工夫する姿が見られた。文化の部においては、クラスの取組（1年創作劇、2年創作ダンス、3年英語劇）を通して、大きな達成感や充実感を得ることができ、リーダーを中心に互いの課題に気づき、物事を試行錯誤しながら解決していく力や粘り強く取り組む姿勢が見られた。

(3) 6年間を見通したVGRを育成するための教育の構築

VGR：VはVision「グローバルな視点を持って将来を見通す力」、GはGrit「他者と協働しながら失敗を恐れず、困難を乗り越え最後までやり抜く力」、RはResearch Mind「様々な科学的手法を用いて、課題の解決に向け探究する力」を指す。

中学・高校の教員から構成される中高連携係が中心となって、6年間を見通した学習指導計画の作成や、中高連携に係る研修会を実施した。生徒課、進路課、広報室、数学科、英語科などは、中高合同で定期的に会議を開催し、連携を深めることができた。高校進学後の生徒情報も充実してきたため、成績の推移等を参考にVGRの育成を評価するとともに、生徒の目的意識と主体性を高め、高校進学後も津山中学校の卒業生と他の中学校の卒業生が互いに困難な場面でも切磋琢磨して成長する生徒の育成を図る。

3 「魅力ある学校づくりを推進するために」

(1) 広報活動の充実

学校案内では生徒の活動の様子や、津山中学校卒業生の声を取り入れて内容の充実を図るとともに、近隣の小学校に6年生全児童分の学校案内を配付した。6月に学校説明会、8月にオープンスクールを実施し、本年度は小学6年生に限らずに小学生に参加をしてもらうことで、本校の様子を知ってもらう機会を設けることができた。ブログの更新や報道発表を積極的に行うなど、従来と比べ取材や報道での掲載も増えつつあり、本校の取組や魅力を発信することができた。今年度も近隣の小学校への訪問を行い、学校の様子を伝えるとともに、各小学校から津山中学校に期待することなどの聞き取りを行った。引き続き、地域に開かれた学校を目指して取り組んでいきたい。

(2) 中高連携の更なる推進

課題研究をはじめとして「エクスペッション」、「“イングリッシュ”ロード」等の特色ある授業と高校のSSH事業との関連付けが明確となり、一層の連携を図っていく。第3学年の高校部活動への早期入部は、異年齢の交流や中学校3年生の後半の活動を充実させることで、心身の成

長を図ることに繋がっており、今後も継続していく。学校祭などの中高合同で開催する学校行事では、中高の生徒の自主性を図るとともに、互いに成長できる環境を整えていく。

4 「充実感を持って働くことことができる職場作りを推進するために」

今年度は「OJTによる教員の指導力の向上」「週1回の18時退校の確実な実施」「計画的な業務遂行による時間外在校等時間月80時間超の絶無」を掲げて働き方改革に取り組んだ。2月末時点で時間外勤務時間は昨年度との比較で約95%、一昨年度との比較で約81%であり、教員が生徒と向き合う時間を確保することに繋がった。引き続き、計画的な業務遂行を意識することで時間外勤務時間月80時間越えの絶無を目指す。校務分掌業務の見直しや校務のデジタル化を進め業務の効率化を図るとともに、勤務の割り振り変更を適切に行い休暇の取りやすい環境づくりに努めていく。ゆとりを生み出し、職場生活と家庭生活の両立、心身ともに健康で生き生きと働ける活力のある職場づくりを目指し、勤務負担軽減に取り組んで参りたい。

2 学校関係者評価委員名

河合 保生（元ノートルダム清心女子大学 文学部現代社会学科教授）
大土井 亮輔（建設設計会社経営 民生児童委員・主任児童委員）
杉山 知子（美作大学名誉教授）
光岡 宏文（津山高校保護者）
都守 秀典（津山中学保護者）

3 学校関係者評価

今年度の経営目標達成に向けての取組等について、内容と成果・課題を説明し、次のような意見・提言・示唆・評価等をいただいた。

- 現在9期生までが中学校に入学し、高校も3期生まで卒業している中で、志願者数が減少している。美作地区の児童の数も減っており、志願者数も減少していることを危惧している。学校の特色をさらに工夫してPRをしてほしい。
- 課題研究について、毎年本当に素晴らしい発表会で立派な冊子もできており、取組には感服している。是非継続し、特にゼミ形式を持続してほしい。
- 中学校では中だるみがあると聞いているが、津山中学校では少ないと感じており、常に向上しようとする生徒の姿勢を感じている。先生方の努力だと思う。模試の結果からも、倉敷天城と近い成績であることに努力を感じる。
- 新しい試みとして採点支援システムの導入を行うことから、先生方が頑張っていると感じている。
- ICTの授業参観など、小学校と連携していることもアピールしてもらえたらと思う。周辺の小学校との関係も良好に築けていることもアピールしてもよいと思う。
- 部活動でも成果をあげていることも喜ばしいことではあるが、津山中学校独自の取組でもある漢

字チャレンジのように全校で競う取組も含めて素晴らしい取組が多いと感じている。

- 授業の内容は重層的によく考えられたものが多く、生徒と先生の話し合いも昔と比べて大きく変化している。授業研究をすることで進化しているのだと感じた。できるだけデスクワークを減らして、生徒に向き合う時間を少しでも確保してほしいと思っている。
- 様々な職種があるが、自主性や主体性をもっている人が様々な場面で成功している。その点については、重点項目にも上がっているが、今後も重点的に取り組んでもらえたらと思う。
- 倍率が低下していることが気になる。他の県立中と比べても、地域の人口に対する児童数の割合に対して、80人の定員では倍率を上げることは難しいと感じている。
- ディスカッション形式の授業もあり、生徒がすぐに話し合いができる姿勢は素晴らしい。同じ目標に向かって学習している姿、クラスでまとまろうという姿が多く見られ、素晴らしいと感じた。
- 職場体験で来た生徒はChromebookを利用していることもあり、PC作業を体験してもらうと、どんどん自分で先に先に進める力がある。ただ、ChromebookはPCと共有することが難しい。職場体験において、生徒との直接のやりとりができればと思う。
- 中高の連携や校務分掌の適材適所、年間行事は適切かなど、「よくあてはまる」という最も良い評価が軒並み低下している。謙虚に回答したのかもしれないが、たとえば年間行事では「よくあてはまる」は0%になっている。中学校保護者で、とくにウォーキング大会に対して厳しい意見が出ていた。
- 広報活動に関する項目が、前年度からプラスになっていて、広報を頑張っている様子が伝わる。
- 一番気になったのは、先生方が忙しすぎるのではないかとということ。保護者からも、「宿題・課題が多すぎて減らしてほしい」や「休日をもっと休ませてほしい」などの意見が出ている。もう少しゆとりができることで、他のいろいろな事にもチャレンジしようという生徒が増えるのではないか。
- 中学校の各種コンテスト・コンクールの参加状況が載っているが、日々の忙しさで参加しづらい状況が生まれていないか気になっている。コンテスト・コンクールなどに参加すると、新聞などメディアにも取り上げられるし、よい広報にもなる。
- 中高合同の学校行事について、体力の違い、飲み物を買える買えないなど生徒指導上の違いもあり、中高一緒にやるのが良いのか、一緒にするとしたらどういう形が良いのか、年間の多様な行事との関係性も含めて再検討をしてほしい。
- 毎年出ているのに解消されない意見で、トイレの洋式化は対応できそうなことだと感じる。
- 学校の改善のためにとっているアンケートだが、アンケート項目が多すぎるのではないか。過去との比較もあるが、毎年あまり変化のない項目については、3年に一度などにしても良いと思うし、特に改善を図りたい項目に精選しても良いと思う。
- 広報の媒体として、Facebookもやっているというが、保護者は40代が多く、どれほど見ているかはわからない。HPなのかインスタグラムなのか、何を一番見るのか、将来的に良い媒体は何なのかも検討してほしい。
- 3年団について、学習時間が減っている。生徒の学習方法が慣れてきて、短時間でも効率よくできるようになったことの現れとは考えられないか。
- 家庭での学習時間が減っていることについて、家庭での学習のモチベーションを高めるには、NHK教育などで紹介されている番組を見る時間や地域や専門家の講演会などへの参加する時間を取り入れることはできないのか。
- 授業については、3年生の課題研究まで様々なテーマを設定できており、ハイレベルなものにな

っている。毎年関心している。習っていない公式や知識や歴史も入っていることがすごいと感じている。そう思って授業を見学すると納得できる授業であった。

- SDGsの授業も行っており、防災に関する内容について、しっかりレポートが書けていることにも関心した。
- 体育祭での全校演技「和っしょい津山」では、短期間で振り付けを考え取り組む姿勢に感動した。子どもたちの熱量と先生の思いが伝わってきた。

4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

進学生（津山中学校の卒業生）と入学生（他の中学校の卒業生）が津山高等学校進学後に互いに切磋琢磨していく関係の構築を引き続き重視するとともに、併設型中高一貫校の強みを生かし、6年間を見通した教育活動の一層の充実を図るため、次の4点を重点的に取り組んでいく。

1点目は、「確かな学力」と「豊かな人間性」の育成である。基本的な学習習慣の確立と魅力ある授業を通してVGRを育成する。1人1台端末を活用し、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。高い志をもち進むべき進路を自覚させ実現させる進路指導の充実を図る。自己を律し自他を敬愛する人間力の育成を図る。

2点目は、特色ある教育活動を充実させ、本校の魅力を発信する。失敗を恐れず積極的にチャレンジしたり主体的に活動したりする場の充実を図る。知的好奇心を刺激し自主性を伸長する本校ならではの学びの充実を図る。魅力の再構築とその発信による積極的な広報活動を図る。

3点目は、中高連携のさらなる推進である。併設型中高一貫教育校の強みを生かし、6年間を見通した教育活動の充実を図る。中高課長会議等による中高連携の強化とDXによる情報共有の推進を図る。

4点目は、働き方改革の推進である。諸会議を精選することで教材研究時間の確保を図る。ワークエンゲージメントの向上を目指し、教科会議等により互いを高め合える同僚性の構築を目指す。計画的な業務遂行による時間外在校時間（月45時間以内、年間360時間以内）の縮減を図ることで、教員が生徒と向き合う時間を確保し、心身が健康な状態で生徒の指導に当たり、健康で生き生きと働ける活力のある職場づくりを目指す。

令和5年度 重点目標と目標達成のための手立てと評価(最終評価)

A:達成できている B:おおむね達成できている C:達成が不十分である

岡山県立津山中学校

	経営計画番号	重点目標	目標達成のための手立て	中間評価	中間期の達成状況と後半に向けての対応	年度末評価	達成状況と次年度に向けての対応	総合評価
一年団	IV1(1)	基本的な生活習慣を確立させ、心身ともに健康でたくましい生徒を育成するとともに、豊かな人間性を育めるよう6年間を見通した基礎期の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒一人ひとりが居心地の良い学級・学年で落ち着いて学習や学校での活動に取り組めるよう、生活アンケートや面談を積極的に行い、教員間で生徒の状況把握に努める。 挨拶の励行や時間を大切にすることへの働きかけを行い、豊かな人間性の基礎の確立につなげる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 生活アンケートや面談を通して、生徒の悩みや不安を把握し対応している。SCによる個別面談も継続的に実施できており、連携しながら支援している。 時間に対する意識、規則・マナーを守る意識を高め、自律した生活ができるよう、指導・声掛けをより徹底したい。 聴く姿勢など、基本的なソーシャルスキルを身に付ける取り組みをしていく必要がある。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の情報交換についてはSCの全員面談も含め日頃から行っており、細目に声掛けや面談を行ってきた。 時間のけじめやマナーを守る意識は改善しつつあるが、教員の指示によることも多く、自分たちで互いに声を掛け合いながら規律を正していけることが今後の課題である。 SNSの使用や対人関係に関しても指導を度々行ってきたが、今後も全教員が授業・HR・学年集会・部活動など様々な場面で「人の気持ちを考えたり」、「善悪の判断をすること」の意義を、わかるまで声掛けを続けていきたい。 	A
	IV2(1) 2(2)	授業を大切にするとともに、生徒自身が自分に適した学びのスタイルを考え、工夫しながら確立できるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> 授業規律の徹底を図る。 宿題＋自主学習（予習・復習）という家庭学習習慣の学びのスタイルの定着を図る。 教科面談等を積極的に実施し、個々の学習時間や方法を把握し、助言や支援を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 教科での分析・面談やフォローアップに取り組んでいるが、学習習慣が定着しない生徒が一定数見られる。できるまでやるという学習に向かう姿勢が育つよう、根気強く指導したい。また、学習意欲につながる学ぶ楽しさを体感できる授業研究も必要と考える。 先輩や高校生、高校の先生方などからも話を聴ける機会を積極的に設定するなど、展望がもてるように働きかけたい。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 生活の記録調査から、家庭学習について平均値では2時間を超えた状態を保っているが、今後も中だるみしないよう、日々の学習への意識付けを継続していく必要がある。 学期を追うごとに、学習方法を工夫する生徒が増え、より質の高い学習ができるようになってきている。主体的に取り組む生徒も多数いるが、意欲の低い生徒も見られるため、次年度に向けても引き続き教科面談や学習会を行いサポートしていきたい。スケジュール管理や課題の把握など、自己管理が苦手な生徒にも長期的な視野をもって指導にあたっていきたい。 3学期に使用した「マンダラート」は、自分なりの目標設定と実現する行動をしっかりと考えるきっかけとなった。 	
	ⅢA2 A3 IV1(2)	失敗を恐れず積極的に挑戦し、最後までやり遂げようと努力する生徒を育成する。自己理解・他者理解に努め、互いに切磋琢磨する生徒を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 学級活動や生徒会活動、校外のコンテストなどにも積極的に挑戦させる。 課題探究や十六夜祭などの取組では、生徒の主体性に任せる場面を意識的に設け、自分たちで決めたことをやり通す過程を経験させる。 日々の生活の中で、互いの良さを生かし合ったり、互いの小さなチャレンジにも気付き認め合える雰囲気づくりに努める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 十六夜祭の取り組みを通して、リーダーを中心に、自分たちで課題を解決していく力やより良くしていこうという姿が見られた。一方で、普段の生活では、全力で取り組めなかったり、切磋琢磨する雰囲気欠けることもある。合唱祭や漢字チャレンジなど、一つひとつのことがひたむきに頑張れる声かけや雰囲気づくりをしていきたい。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 何事も「やりきる」という雰囲気が全体に徹底できていない場面もあり、学級や学年への適切な声掛けや仕掛けが年間を通じても必要だった。 行事では、十六夜祭や合唱祭に向けての取り組みを通して、リーダーを中心に、自分たちで課題に気づき、試行錯誤しながらも、解決していく力や粘り強く取り組む姿勢が少しずつ育った。今後、さらに生徒が主体となって活動できる機会をつくり、一人ひとりの良さが発揮でき、切磋琢磨できる学年運営に努めたい。 課題探究活動で取り組んだ「津中生が拓く地域の可能性～自分と社会をつなぐ～」は地域の方の御協力もいただき、生徒にとって地域の魅力を発見するとともに地域について学び考える大変よい機会となった。また発表の機会を持つことで発信力や表現力の伸長にもつながった。 	
二年団	IV1(1) 1(3)	自立した学校生活を送るために必要な基本的な生活習慣を確立させ、個人や集団の目標に向かって主体的に行動できる活気に満ちた生徒の育成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 生活アンケートや十六夜ノート等の記述から、生徒の思いを把握し、教員間で共有するとともに、日頃の情報交換を緊密に行う。 時間やスケジュールの管理、挨拶、清掃等当たり前のことができるように日頃の声かけや授業、集会など様々な場面を通じて指導を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 生活アンケートやいじめアンケート等では生徒の記述をもとに早期に面談等を行うことができ、学年間でも情報交換を行うことができている。 時間や服装等の基本的な生活習慣の指導についても引き続き学年で協力して行っていくとともに、3年生に向けて各々の成長を促していきたい。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 年間を通して学校生活での不安や困りごとを訴える生徒もいたが、早期に面談や対応を行ったことで大きな問題になる前に解決できた。また、学年間で情報共有を行い協力して対応することができた。 時間や服装など引き続き指導が必要な場面はあるものの、学年としては時間を守ろうとする意識、基本的な生活習慣は身に付きつつある。今後も高校進学を見据えて「当たり前のことが当たり前でできる」集団を目指して指導を行ってきたい。 十六夜ノートの工夫などもあり、生徒自身が自らのスケジュール管理を通して見直しをもった生活を送ろうとしてきていることは、次年度に繋がる成果であると感ずる。 	
	IV1(2) 2(2)	自らの課題と向き合い、中高6年間を見通した学習スタイルを確立し、基礎基本の定着、思考力・判断力・表現力を育成するとともに、主体的に学習に取り組む生徒を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習の充実に向けて、考査等の振り返り、分析を活用し、ICTを効果的に活用することでより深い学びに繋げさせる。 1カ月に2冊以上の読書量を確保させるとともに、本の紹介等を通して質の向上に努めさせる。 教科面談等を利用して個々の学習時間や方法を把握し、助言や支援を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習への取り組み方や学習時間などに課題を残している生徒が見られる。年度後半に向けて各教科とも連携し、個に応じた指導やアドバイスを行っていく。 6月の生活の記録では「学習＋読書」の時間が162分であった。年度末に向けて読書の時間をさらに確保できるように学年として朝読書の指導や文化委員会と連携した取り組みを企画していく。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 各教科の指導を通して高い目標に向かって努力する生徒が増えてきている反面、苦手意識や学習へのモチベーションの低下から学習へ意識が向かない生徒も見られる。全体の底上げを図りつつ、上位層を伸ばすような意識づけが来年度に向けた大きな課題である。 第3回の生活の記録では、「家庭学習＋読書」の時間が153分であった。この結果からもわかるように、学年全体として学習や読書への意識づけが不十分であったと考えられる。教科の学習はもちろん読書の重要性についても引き続き指導を行っていく。 スマホ等娯楽の時間については徐々に増加傾向にあるため、各々がどのように時間を使っていくのかという点について次年度に向けた大きな課題の1つであると感ずる。 	
	ⅢA2 A3 IV2(1)	学校生活や校外行事において積極的に挑戦し、最後までやり遂げることができる生徒を育成する。また、個性を認め合い、互いに切磋琢磨できる人間関係づくりを推進する。	<ul style="list-style-type: none"> 学級活動や生徒会活動、校外のコンテストなどに失敗を恐れず挑戦し、最後まで粘り強く取り組むことを通して生徒が成長できるように助言や支援を行う。 互いの個性を認め合いながら、よりよい人間関係、集団作りのために他者と協働する場面を多く設ける。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 十六夜祭では、多くの生徒が実行委員へ立候補し失敗しながらも最後までやり抜いたことで充実感や達成感を味わうことができた。 コンテストや生徒会役員など、昨年までと比較して多くの生徒が挑戦することができている。引き続き生徒の挑戦の場を提供し、生徒の可能性を広げるような指導を行っていく。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 学級活動や生徒会活動等、生徒自身が挑戦しクラスや学校に貢献しようという場面が多く見られた。十六夜祭では実行委員のベクトルが揃わず最後まで大変であったが、最後までやり切ったことで生徒にとっては満足感の高いものとなった。来年度に向けても失敗も経験させながら生徒の成長へと繋がるような指導を意識したい。 コンテストや検定に挑戦する生徒をさらに増やしていく必要性を感じる。力を持った生徒も多くいるため積極的な後押しをしてやることで生徒の可能性を引き出していきたい。次年度は最高学年として多くの生徒がより活躍できるよう集団の雰囲気づくりを大切にしていきたい。 	

	経営計画番号	重点目標	目標達成のための手立て	中間評価	中間期の達成状況と後半に向けての対応	年度末評価	達成状況と次年度に向けての対応	総合評価
三年団	ⅢC1 Ⅳ1(1)	Vision「見通す力」を高めることを目指して、目標設定や振り返りなどを徹底し、個人や集団の成長を実感させることを通じて、主体的・自発的に行動できる活力に満ちた集団を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 十六夜ノートに年間や月間、1週間の行事や自分のスケジュールを記述し、連絡事項の徹底及び自分の記録を残させるとともに、一定期間ごとの目標を適切に設定し、振り返りを行い、自己分析を通して達成感を持たせる。 ダイアリー（教師と生徒のやりとりをするノート）を通して、生徒の実態を把握するとともに、目指す方向について適切な指導や助言を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 十六夜ノートの携行を76.1%の生徒がしている。「有効に活用できている」と回答した生徒は68.4%であり、第二学年の時に比較して増加している。一方、「携行していない」「有効に活用できていない」生徒は全体の30～40%程度おり、指導の改善が必要である。 ダイアリーは週2回の提出を指示している。しかし、提出できていない生徒が19.2%いる。提出できない生徒に対して、日ごろの思いや考えを聞くような声掛けをしていきたい。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 十六夜ノートの携行を81.2%の生徒がしている。「有効に活用できている」と回答した生徒は72.9%であり、10月に比較して増加している。一方、「携行していない」「有効に活用できていない」生徒は全体の20～30程度と減少している。第2学年から始めたこの取り組みであるが、ここ2年間で最も十六夜ノートを活用した期間となった。課題研究に取り組む3年生は、個人の研究を進めるために研究計画を立てたり、気づいたことのメモを取ったりすることが必要なため、十六夜ノートを活用したと考える。課題研究や十六夜ノートの活用を促すことで、見通しをもち、主体的に生活に取り組めるような態度が育成できたと考えます。 学校行事においては、十六夜祭などを中心に計画を立て、学校全体のリーダーとしての動きを考え活躍することができた。 	A
	Ⅳ1(1)	Research Mind「探究心」を高めることを目指して、岡山型PBLの考え方を取り入れ、課題研究に取り組むとともに、学力の充実に向けて努力する生徒を育成し、思考力・判断力・表現力の育成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 十六夜ノートに日々の疑問や探究したいことについて記述させるとともに、課題研究に資する情報を適宜記入させる。 「授業の予習＋復習」2時間「自主学习・読書」1時間の家庭学習が効果的な取組になるように指導や助言を行う。 課題研究の遂行に当たって、各教師の専門性や特性が発揮できるように校内体制を充実させるとともに、教師は伴走者としての支援することを意識して指導を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 6月の「生活の記録」調査では「学習＋読書」が154分であり、中学校生活で最も少なくなっている。課題研究に割く時間もあると考えられるが、いわゆる「中だるみ」への対応を明確にしたい。 課題研究は校内体制の構築に加え、外部との連携（美作大学の先生の招聘、J-parc講演会など）を意識的に探心心の育成に努めている。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 課題研究に取り組んだ全ての生徒が、レポートを書き、ポスター発表をすることができた。振り返りの記述の中には、「普段から疑問や問題意識をもって生活することが大切」との言葉が多く、探究する姿勢の大切さに気づいた生徒が多かった。 1月の「生活の記録」では、1日の平均「学習時間＋読書」が153分であり、同様の結果であった。また、「スマホ・娯楽等」は1週間731分であり、前回11月の590分よりかなり増加し、危機感を抱いている。また、睡眠時間は6.9時間であり、6月の7.5時間から減少の傾向が続いている。 学習面では、見通しを持って意欲的に学びに向かっている生徒も多いが、身に付いていた家庭学習の習慣が乱れている生徒も散見される。 	
	ⅢA3 Ⅳ1(1)	Grit「やり抜く力」の伸長を目指して、自ら学校行事や校外の活動に積極的に挑戦し、成功や失敗を繰り返しながら最後までやり遂げる生徒を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 最高学年として、主体的に活動する機会において、計画、立案、実施など最後まで、自身の力でやり遂げられるような指導を心がける。 十六夜祭や合唱祭などの学校行事において、見通しをもった活動を意識させ、自分たちでより良いものを考えながら最後まで粘り強く取り組ませる。 校外のコンテストやコンクール、検定取得への積極的な参加を促す。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 前期専門委員会においては「全校学習会」や「文化トーク」など全校を巻き込んだ取組が計画、実施され、生徒は主体的に活動した。 十六夜祭では日本の「アニメ」を英語に翻訳し、工夫をしながら英語劇の創作に粘り強く取り組んだ。 英検、漢検、英語スピーチコンテストなど積極的に参加をしている。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会活動では、これまでできなかった全校縦割りのレクリエーションや勉強会など第3学年が中心となって行事をつくり上げ、やり遂げることができた。学年の枠組みを越えた取り組みは現在の津山中学校の魅力の一つとなっている。 作文、英検、漢検やスピーチコンテスト、物理コンテストなど積極的に挑戦し、個人やグループで頑張りながら結果を残すことができた。 どの行事でも、主体性やリーダーシップを大いに発揮し、特に修学旅行や十六夜祭、課題研究発表会などでは、様々な人が実行委員を経験し、生徒が自分たちで考えて実行していく力を多くの生徒の中に育むことができた。 	
全体	ⅢB2 Ⅳ2(3)	【教務課】主体性を伸ばす学習指導力を向上させることで、生徒の主体的に学習する態度を育成する。学習評価をさらに充実させ指導に生かすことで、生徒の学力を向上させる。 【広報室】高校広報交流戦略室や中学校の学年団・教科等と連携し、学校の教育活動等の内容や成果を発信する。広報活動を、生徒の活躍の場の一つにする。	<ul style="list-style-type: none"> 【教務課】3観点を意識した授業実践をもとに研修を行い、実践した好事例を共有する。(ICTの活用も含め、研修を年2回以上) 採点支援システムの研究と、学習効果を高める手立てについての研修を1回以上行い、学習評価を生かした実践の好事例を共有する。 【広報室】さらなる効率化を図りながら、毎月5回以上のHPの更新、毎学期1回以上の報道発表を行う。また、オープンスクールやホームページのブログ作成等で生徒に役割を与え、生徒参加型の広報活動の形をさらに発展させる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 【教務課】3観点を意識した授業実践の事例を共有する研修を実施した。 中高合同研修でも、中学校での研修を生かし、ICTや授業評価など実践例を共有することができた。 採点支援システムの研修を行い、導入が促進された。 学習評価を生かした実践の研修を行い、生徒の学力向上につなげたい。 【広報室】毎月5回以上のHPの更新、毎学期1回以上の報道発表は達成できた。また、ブログやHUGジュニアの記事作成では、年間計画や月別計画を立て、効果的・効率的な広報活動を行うことができた。特にブログ作成では、部活動において生徒自身が情報発信できる場を設けることができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 【教務課】授業研修や事例共有を通じて、授業実践の質の向上や授業改善を図ることができた。 探究的な学習を行う授業実践も増加し、生徒の思考力を深める場面が多くなった。 採点支援システムの導入を促進でき、採点業務を軽減することができた。 学習評価を授業改善へと繋げ、より授業実践の質を向上させられるような研修内容や方法の改善を図る。 【広報室】広報室以外の職員との連携をより強化し、毎月5回以上のHPの更新、毎学期1回以上の記者クラブへの資料提供を達成することができ、メディアにも複数回取り上げられ本校の活動を発信することができた。また、ブログやHUGジュニアの記事作成では、年間計画や月別計画を立て、効果的・効率的な広報活動を行うことができた。さらに、生徒がオープンスクールのボランティアやブログ作成を行い、生徒が主体的に広報活動に参加する場を設けることができた。 	
	Ⅳ1(1) Ⅳ2(2) Ⅳ3(1)	【進路課】生徒に進路のVisionを持たせ、学習や探究活動のResearch Mindを向上させるとともに、これらの実現に必要な強いGritを持つ生徒を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 高校・大学・社会での学びに対する関心を高める学習の場を充実させる。 課題探究活動の充実と系統立てを目指す。 「生活の記録」を用いて取組状況を振り返らせ、それに教員による評価を加えることで、自己を客観化させ、VGRの伸長を図る(目標・達成方法・学習時間)。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 地域研究(1年)や職業研究(2年)で地域の人や職場から社会や仕事について学ぶ場を十分提供できている。進路選択に絡めて高校・大学での学びに関する情報提供の場が十分ある。 課題探究活動は、1・2年次に身に付けた調査・取材・考察・発信の手法を3年次の課題研究と発表で活かすことができるプログラムを提供している。 6月の生活の記録で、学習計画(V)と自主的な学習方法(R)の自己評価は9割以上が肯定的だが、家庭学習＋読書時間(G)(目標値180分)は、1年187分、2年162分、3年154分とやや少ない傾向である。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 地域研究や職業研究で地域の人や職場から社会や仕事について学ぶ場を十分提供できた。進路選択に絡めて高校・大学での学びに関する情報提供の場を十分設定できた。 課題探究活動において、1・2年次に身に付ける調査・取材・考察・発信の手法を3年次の課題研究と発表会で活かせるプログラムを提供できた。各学年とも大きな成果があった。 年3回の生活の記録を行った。第1回までは学習計画(V)と自主的な学習方法(R)の評価を行ったが、9割以上の生徒が達成しているため、家庭学習＋読書時間(G)(目標値180分)に焦点化して生活の記録に取り組みさせた。家庭学習(120分)＋読書時間(60分)の目標設定を行ったが、各学年の達成率は、3年生学習(11月:49.3→1月:58.0)・学読(28.0→27.5)、2年生学習(63.4→65.3)・学読(23.9→18.7)、1年生学習(63.8→73.0)・学読(37.7→43.2)であった。生活の記録が単に「記録」になるのではなく、「Self-Managing Sheet」となるよう指導していきたい。 	
	Ⅳ1(3) Ⅳ2(1)	【生徒課】生徒の前向きな成長を促すために、小さなことから凡事徹底ができるようにする。生徒が安心して楽しく充実した学校生活を送ることができるようにする。学校行事、生徒会活動は失敗を恐れず積極的にチャレンジしたり、主体的に活動したりする場となるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> 「みんなで 一貫して 最後まで」をスローガンに、全教職員で「時間・挨拶・掃除」の指導を徹底して行う。 生徒対象の生活アンケートを学期に2回、いじめアンケートを年2回実施して、生徒理解を深め、情報を共有し、問題の早期発見、早期対応、予防に努める。 上記のことを基にいじめ問題対策基本方針の内容を推進する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 各種委員会やSHRに時間を通じて「時間・挨拶・掃除」の指導や注意喚起に努めた。 生活アンケート(3回)を活用し、問題の早期発見、いじめ対策委員会の開催など早期対応をすることができている。 中高合同での十六夜祭を開催することができ、生徒の活躍の場を確保するとともに、保護者にその姿を披露することができた。次年度に向けて、より良い開催となるよう協議の場をもつ。 隔週での開催をベースに今年度は生徒指導係による生徒情報の共有を行っている。また、共有した内容を各学年に伝え共通理解を図っている。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 生活アンケート(年5回)といじめアンケート(年1回)を活用し、問題の早期発見、いじめ対策委員会の開催など早期対応に努めている。今年度生活アンケートの項目にいじめに関する事柄を加え、いじめアンケートの回数を減らした。来年度に向けてアンケート内容の精査や対応の確認を行いたい。 スマートフォンの所持率、持ち込み率が近年非常に高くなってきている。それに伴いトラブルも毎年起きている。次年度は全校生徒がスマートフォンを所持しているものとして指導や講演などに取り組んでいきたい。 次年度の十六夜祭の文化の部と体育の部の日程が離れるため、中学校としての取り組みの見直しと計画を行いたい。また今年度に引き続き、中学生・高校生がより一体となり一つの行事に取り組むことができるようにしていきたい。 部活動は地域移行など転換期を迎えている。本校としての魅力を再確認するとともに、生徒がより輝いた学校生活を送ることができるよう高校を含め、検討をしていきたい。 	